



和文論文作りを通して コミュニケーションを考える

その4 「蛙の子」と「クローン蛙」

呉大学看護学部
山下 洵子

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」

川端康成の有名な「雪国」は、このよく知られた「美しい」書き出しで始まる。日本人なら、ここに描かれた風景に出会った人は多いはず。それをこの表現に重ね、主人公と一緒にトンネルを抜け、そこに広がる一面の雪世界を見ることができよう。

実に見事な表現だ。到底、私などにはまねができない。なぜか？ 文学的素質がないからである。そして、もうひとつ、自然科学の論文では、このような文章表現をすることがまずないので、こうした文章構成の着想から遠いところにいるからである。(正確に言えば、小学校から高校までの国語や作文の時間で若干培われたとは思いますが、その後磨けなかった、ということである)。

なぜ、こうした「美しい」文が文学的作品作りの経験が乏しい私には作れないのか、ここであらためて考えてみたい。それは、とりもなおさず、自然科学の論文作りに、私が日頃どのような思いで取り組んでいるかの見直しでもある。

■ 文学と自然科学の論文との違い

あらためて「トンネルを抜けると雪国であった」を眺めてみる。

この文章の構成はかなりあいまいだ。主語がはっきりしない。おまけに、述語が二つもあって、しかも、それぞれの主語は同じではないのに、どちらにも誰なのか何なのかが書かれていない。もし、「トンネルを抜けると雪国に出た」とか「トンネルを抜けて雪国に着いた」とあれば、主語が隠れているにしても、(私が乗っている)列車が主語であろう、と予想がつく。あるいは、「トンネルを抜けると、そこには一面の雪景色が広がっていた」とか「列車がトンネルを抜けた。途端に、銀世界が目に入ってきた」とあっても、とまどうことはないだろう。

そう思いながら気がついた。どうやら、私は、頭のどこかで「英語ならどう表現するか？」と考えながら文の構成を見ているようだ。そうして、英文として受け入れられない表現は、知らず知らずのうちに閉め出しているらしい。倉本¹⁾も同じようなことを述べているから、これは、自然科学の分野で文章作りをやってきた者の共通の頭の動きかもしれない。

英語表現では、必ず、主語があって述語がある。そして、述語は必ず主語に対応して主語の近くに置く、という鉄則がある。「雪国」の書き出しはこれからはずれる……。そんなことを考えていたら、この書き出しが英訳でどう処理されているのかが気になった。さっそく、英文学に関心のある、友人の桜井弘子さんにメールで問い合わせたところ、Seidenstickerによる訳は次のようである、と返事をもらった。

“The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky.”

やました じゅんこ

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

実に明快だ。私がつまずいたところは完全に解決されている。二つの文に分けてあって、それぞれの主語は違えてある。これなら、ノーベル賞の審査委員も表現の唐突さにとまどうことはなかったであろう。ということは、ノーベル文学賞というのは、スウェーデン語や英語で書かれていない限り翻訳者の力量が問われる賞でもある、ということであろう。原文がどんなに素晴らしくとも、訳の質が悪ければ、日本文学を日本語以外の言語でしか読まない人（読めない人）の目に止まりようがないのだから。

しかし、自然科学の分野ではそうはいかない。論文は原則として英文で書かれる。通常、英文での発表だけが評価の対象となるからである。和文で書いたのでは、日本語がわかる同業者にさえ見向きもされないことが多い。英語は母国語でないからとか、特別な訓練を受けてこなかったからとかいった、言い逃れは通らない。それに、例え、素晴らしい内容の論文が日本語で書いて幸いに立派に英訳してもらえたとしても、それでは自分の言葉で表現されない歯がゆさが残る。

そういうわけで、最終的にはネイティブ・スピーカーのチェックを受けるにしても、ともかく英文で書くことになる。当然、文責はすべて著者本人にある。英訳が下手だったからノーベル医学生理学賞をもらいそびれた、などの釈明はありえない。

■ 主部と述部

ところで、「トンネルを抜けると雪国であった」を例に引くまでもなく、私たち日本人が、主部と述部が対応していない文（会話）に出会うのはさほど珍しいことではない。私自身、喫茶店で、連れが「ブレンドを」と注文すれば、「私はアメリカンです」と平気で言う。英語に直訳すれば“I am American”である。しかし、こっけいだとは思わないし、店の人が面食らってしまうだろうと心配したこともない。

主語と述語がちぐはぐであってもあまり違和感を抱かないのは、日本語では文の終わりに述語が来るという事情と多分に関連があるだろう。つまり、主語があったとしても、それに出会ったあとだいたいぶたつてから述語にたどり着くことが多いから、主語と述語がきちんと対応していなくてもそれほど気にならない、ということだろう。

また、しばしば主語がない文にも出会う。それを別に気にしないことは多いし、なくとも、たいてい無意識のうちに適当に補いながら読み進む。そんな芸当(?)ができるのは、日本語の文法を知らず知らずのうちに身につけた私たち日本人の特徴なのかもしれない。第一、普段の会話で、「私は」「私が」で始めることをほとんどしない。「私」であることがはっきりしているのに、いちいち「私」と書けば、読み手にうっとうしくうつるだろうし、「私」を連発すれば、随分自己主張が強い人だという印象を与えるだろう。そんな恐れがあるから、主語、特に第一人称を書くのは最小限にとどめる。自分がどうした、自分はどう感じる、自分はどう考える、自分は何だ、と言おうとすれば、「I」という主語抜きでは文をなさない英語での表現と大きく違うところだ。

そういう構成に慣れているので、文脈がひどく入り乱れてさえしていなければ、まるで「あいまいな」まま丸ごと取り込んでわかってしまう独特の知恵をもち合わせているかのように、四つも五つもの文が助詞や接続詞などでずるずる繋がってしようと、しかも、そのなかに主語と述語の不一致があろうと、あるいは主語が抜けていようと、ともかく流れにそって文脈ごと飲み込みながら読み進んで行ける。(このだらだら繋がる、しかも主文の主語が隠れている文をそれほど苦労しないで読んでもらえる、と期待します!)

こうした芸当は大いに買おう。特に、文学作品を読むときには必要な能力であろうから。文学作品を読むときは、どンドン読み流していくのが普通で、筋の展開にいちいち「なぜ?」「どうして?」と疑問をは挟むことはまずない。例えば、物語の中程で、

「きぬ（山下注：「おれ」の妻）はいまもって、火事の晩のおれの振る舞いを赦してはいない。——おれだって…。鶴子（山下注：「おれ」たちの娘）の具合がわるくなったとき、きぬは芝居を楽しんでいたということに、終生こだわり続けるだろう。」²⁾

というくだりに来れば、「おれ」はきぬとの絆をこころあたりで断ち切る決心をするだろう、と察する。「今夜〈貧宮〉（山下注：萌子とのデイトの借家）のことで、園江（山下注：「自分」の妻）をひそかに

怒らせ、疑念も起こさせたが、自分がどれほど萌子に執着しても、この生活の形態を壊すことはあるだろうか。』³⁾

と読み来れば、「自分」と萌子との関係はそのうち壊れるだろう、が、この有り様ではその前に萌子から手痛い仕打ちを受けるだろう、と察する。

そう察する。理屈ではない。どうしてそう察するのか、深く詮索しようとは思わない。

文学作品は頭で読まない（読まなくていい）。心で読む。どこかの飲料会社のCMではないが、“No Reason.”「ココロがわかっている」。そのココロの有り様は、赤瀬川原平いうところの、まさに「心から」、つまり「存在の根底から」起こってくる⁴⁾感情に任せられる。

そして、読み手の予想と大きくはずれて筋が展開しようと、不服はない。むしろ、書き手の巧みな筆さばきに乗せられ、意外な展開を楽しむだろう。どう読もうと、読んで何をつかもうと、読み手の勝手。書き手とは歩んできた人生が違うのだから、書き手が予想もしなかった読後感をもつこともあろうし、書き手のメッセージとは全く逆の捉え方をすることもあろう。そして、読み手の人生だってそれぞれ違うのだから、10万人が読めば、10万の違う感想が出てきて当然。

■ あいまいさの排除

しかし、自然科学の論文ではそうはいかない。書き手には、始めからはっきりした書く道筋があり、論題の結論は既に出ている。その結論とそこに至った論理を伝えたい。そのために書く。だから、なんとかして読み手を引きつけ、引きつけたら最後まで自分の筋道に沿って歩いてもらわないことには困るのである。なぜ書くのか、なぜそういう結論を導いたのかが、直に読み手に伝わっていかなければならない。何となくわかるころもあった、という程度の読後感をもってもらうようでは書く意味がない。第一、そんな書き方をすれば、忙しい時間を割いて目次を開いてくださった読者に失礼というもの。

だから、書くという作業は容易なことではない。ここで、私自身が苦勞して心がけている点を少し述べてみたい。

何はともあれ、主語を明確にする。私自身の考えなのか、他人の文献からの引用なのか、一般的にそう言われていることなのかなどはっきりさせる。それから、読み手が途中でひっかからないように、つまづかないように、できるだけ注意をばらう。つまり、すんなり入ってもらうよう、論文の意図がはっきりわかるように書き出しを工夫する。いったん読み始めたら、途中で「なぜ?」「どうして?」の疑問が出てこないよう、あるいは出てくるのが予想されれば、その疑問の回答となる文をできるだけ早いうちにはめ込む、などの工夫をする。

公理として「蛙の子は蛙である」と書くときには、説明はいらない。しかし、「カエルの皮膚からカエルをつくった」という論文を書こうとすれば、これには説明がある。目的は? 方法は? 既にいろいろなクローン動物が誕生しているが、それとの違いは? 健康状態は? 寿命は親ガエルと同じ? などの質問を想定しながら、それへの答えを整理しながら書き進める。

できるだけ簡潔にしたい。そして、全体の仕上がりもできるだけ短くする。みんな忙しいのだ。読んでもらうということは、忙しい人を拘束することになるのだから、できるだけ短くしたい。(いまお読みいただいているのは科学論文ではないが、こうした小文は、刷り上がりで3頁ぐらいが限度、とみている。) そうそう、そもそも、「面白そうだな、読んでみようかな」と、誰かにとりあえず食指を動かしてもらう必要がある。人の気を引く表題作りも苦勞するところだ。

そんなことに気を配りながら、共同研究者(自然科学の分野では、単独で研究を進め単著で発表することはほとんどない)と論議を尽くして仕上げる。

そうして、最後に行くこと。投稿する前に、他の人に読んでもらう。これでよし、と思っても、一人よがりの思い込みで終わっていることもある。はっきりしない書き方をしている、読み手を混乱させることもある。そういうつもりではなかったのに、そうもとれる、という言い回しになっていることもある。意図せずに、“おかしな”日本語、“乱れた”日本語作りに加勢する表現になっていることもある。引用した文献の解釈を誤って紹介していることもある。謝辞の書き方ひとつにしても、思わぬ影響を及ぼ

すこともある……。

そんなこんないろいろな恐れがあるから、世に出す前、できるだけ誰かに読んでもらってあれやこれやの危惧を少しでも減らすようにしている。

私は学生生活を終えてから呉大学に来るまでの長いあいだ、東京慈恵会医科大学医学部（現）生化学第2で働いたが、そこではとりわけ村上安子先生にお世話になった。何本もの論文を素稿の段階で目を通してもらい、実験の進め方だけでなく論文の書き方においてもたくさんの助言と指導を得た。よき先輩にどれだけ育てられたことか、まことに有り難い出会いに感謝している。先生はビタミンB₆やポリアミンの分野で世界的評価のある素晴らしい業績をたくさん残されたが、簡素でわかりやすい論文を書かれることでも定評がある。年季を入れればそれなりに先輩の域に達するだろう、と若い頃は自分に期待をしていたが、とっくに脱帽。

来年3月、先生は停年退官されるが、私にはもう少し猶予期間がありそう。先生から学んだことを少しずつ生かしながら、よりよい論文づくりに励みたい。その心構えを知っていただくことを先生へのはなむけの言葉としますと言えば、きっと喜んでくださると思う。

参考文献

- 1) 倉本宣：看護学統合研究 1 (2) 55-56, 2001.
- 2) 杉本章子：東京新大橋雨中図。東京：新人物往来社 p.269, 1988.
- 3) 田久保英夫：仮装。東京：新潮社 pp.222-223, 2001.
- 4) 赤瀬川原平：困った人体。東京：講談社 p.43, 2001.